漂流

吉村昭

漂流（ひょうりゅう）

昭和五十一年五月十日　印刷
昭和五十一年五月十五日　発行

定価八五〇円

著者　吉村昭（よしむらあきら）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話　業務部（〇三）二六六一五一一一　編集部（〇三）二六六一五四一一　郵便番号一六二　振替　東京四一八〇八

印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社

© Akira Yoshimura 1976 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

漂

流

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

序

高知市から国道を東に二十キロ近く進むと、右手に太平洋のひろがりがみえる。そこに赤岡という町があり、国道沿いの墓地に小さな墓石が立っている。

それは、私がこれから書こうと思っている長平という人物の墓である。

私は、かなり以前から漂流者の記録に興味をもち、特に江戸期のものを多く読み漁ってきた。長平は、それら漂流者の中の一人だが、漂流者の記録を読んでいる間、私は、終戦後かなりの歳月をへてから南の島々で発見され、帰還してきた元日本兵のことを連想するのが常であった。

江戸時代の漂流者は、大半が帰国することもできず死亡している。その死の形は、溺死、餓死、病死などさまざまで、異国の地に上陸後、その地の住民に殺された者もいる。これらは、漂流に伴う十分に予想される死といえるが、意識して異国にとどまり、生涯を終えた者も多い。それは、かれらが幕府の切支丹禁制の政策に恐怖を感じていたからである。

当時、幕府は、異国からの帰還者がキリスト教信者になっていることを警戒し徹底したきびしい取調べをおこなった。帰還者は、持帰った品物を一品残らず押収され、他にかくし持っている物はないかと、全裸にされて肛門の中まで探られた。その扱いは囚人同様で、取調べ期間も長く、その間牢に入れられたままであった。漂流者たちは、そうした扱いの末に罪をきせかけられることを恐れ、帰国の強い望みをいだきながらも、異国の地にとどまるのである。

元日本兵が終戦後南の島々に身をひそめて出てこなかった理由は、一定していないだろうが、俘虜となることを恥辱とした考え方がかれらにかなりの影響力をあたえていたことはたしかだろう。むろん、出てゆくことによって殺されるという恐怖心もひそんでいたはずである。

私が、江戸時代の漂流者の記録に興味をもつのは、突然のように姿を現わす元日本兵に対する驚きが原因なのかも知れない。それとも、戦後南の島々から出てくる元日本兵に対する驚きが、江戸期の漂流記を読みあさらせているようにも思える。江戸時代の漂流者たちと、それら元日本兵の行動、かれらを取り巻く環境は、余りにも類似点が多い。元日本兵も、戦争という激しい潮流に押し流された漂流者

たちなのだろう。

終戦後、南の島々から帰国した元日本兵の中で最も強烈な記憶として残っているのは、アナタハン島からの帰還者たちであった。かれらが日本にもどってきたのは昭和二十六年夏で、つまりかれらは終戦後六年間、日本の敗戦を信じずアナタハン島に身をひそめていたのである。

その島には、日本兵、軍属、民間人計三十一名の男と一人の婦人がいた。そして、島で生活している間に、六名が殺害され、二名が病死し、三名が原因不明の死をとげている。

私は、或る日、アナタハン島からの帰還者の一人と会った。かれは、六十六歳になると言ったが、皮膚はつややかで年齢よりはるかに若くみえた。その姓を、仮にPとしておく。

P氏は、炬燵を間に私と向き合って坐った。かれは、話しはじめた。

昭和十九年五月二十五日朝、横浜港を十六隻の漁船が出港した。それらは、太平洋沿岸の各地から海軍に徴用された鰹船で、水兵二名、軍属の漁師八名計十名ずつが乗り組んでいた。P氏は、一等水兵として「兵助丸」という神奈川県三崎の漁船に乗船していた。

それらの船の目的地は、中部太平洋最大の根拠地トラック諸島で、第四艦隊司令部の指揮下に入って、その付近に点在する多くの島々の間の物資輸送に従事することになっていた。各船の武器は、水兵の所持する旧式の小銃二挺のみであった。

船は、鰹船特有の尖ったへさきを振り立てるように進み、伊豆大島を経て南下、小笠原諸島で食糧を補給した。その後、各船は小集団にわかれて、さらに南へと進んだ。「兵助丸」は、函館で徴用された「曙丸」とともに小笠原諸島からマリアナ諸島に近づき、島づたいにサイパン島方面へ進んだ。

戦史によると、六月十一日にはアメリカ機動部隊がマリアナ諸島に来襲しているが、「兵助丸」と「曙丸」は、翌十二日早朝、二機の米軍機の来襲をうけた。米軍機は、激しい銃撃をくり返し、短時間で両船を沈没させ、乗組員は泳いで近くの島にのがれた。その島が、アナタハン島であった。

翌十三日、同じように米軍機の攻撃をうけた「海鳳丸」の乗員も上陸してきて、計三十名が集まった。それは、米軍がサイパン島に上陸作戦を開始する二日前であった。

島は、東西七・五キロ、南北三・五キロで、ほとんど平坦地はない。カナカ族の島民が約四十名いた。

「日本人などいないと思っていましたが、ひょっこりと日

本人の男とアッパッパーを着た若い女が出て来たので驚きました」

炬燵の向こうに坐るP氏は、言った。

男は農園技師で、戦局が悪化したため妻子をサイパン島に疎開させていた。また女は、南洋興発コプラ園に勤める男の妻であったが、夫は近くのバガン島にいる妹を迎えに行ったまま連絡を断っていた。

女一人をまじえた日本人三十二名が、共同生活をはじめた。食糧はタロ芋、バナナ、ヤシ蟹、鼠、魚などであったが、分散して生活する方が食生活を安定させるので、気の合った者同士が二、三人にわかれて島の各所に散った。女は、農園技師の男といつの間にか肉体関係をもつようになっていて、二人で暮らしていた。

昭和二十年八月十五日、日本は連合国軍に降伏したが、アナタハン島にいる日本人たちは、戦争の終ったことを知らなかった。それまで時折銃撃にやってきた米軍機が姿をみせなくなったことを不思議に思ったが、遠く南方のサイパン島に米軍機が爆弾を投下しているのを望見し、戦争は依然としてつづけられているのだと信じた。それは、米軍機の投弾演習であったのである。

戦争が終り空襲が絶えると、アナタハン島に平穏な空気がもどった。

三十一名の男と一名の女は、分散して生活していた。漂着したアメリカ製のドラムカンで雨水をためることができて、それまで最大の悩みであった飲料水の問題も解決し、ヤシ酒を作って昼間から飲む者も多くなった。かれらは、ただ一人まじっている女の存在に平静ではいられなくなっていた。かれらは、女と同棲している農園技師が女の夫ではないことを知るようにもなり、女を単なる女として意識しはじめていたのだ。

かれらにとって、戦争はまだ終っていなかった。戦場である小島にひそむかれらには、正常心を欠いた者も多かった。

女は、天真爛漫とも思えるほどおおらかな性格であった。甲高い声をあげて、よく笑い、歌をうたった。彼女は、男たちから「カズちゃん」と親しげに呼ばれていた。

終戦後一年ほどの間は、かれらの間に一応秩序めいたものはみられたが、昭和二十一年八月、農園技師と女が山中に墜落していたB29の残骸を発見した時から情勢は一変した。技師と女の通報で、水兵と軍属たちはその墜落現場に急いだ。かれらにとって、それは得難い生活必需品を入手できる恵まれた機会であったのだ。

パラシュートが落ちていたが、それは衣類として利用され、ジュラルミンの破片は容器、庖丁、剃刀などに変った。

召集される以前新内流しをしていた水兵は、ジュラルミン板、金属線で三味線を作り上げたりした。

残骸の中から四挺のピストルと弾丸が発見された。ピストルはすべてこわれていたが、二人の水兵がそれを解体し、二挺のピストルに組立てた。それらは、二人の所有に帰した。

ピストルを入手したことが、水兵の一人に強い欲望を起こさせた。かれは、五日後女の住む小舎にやってくると、農園技師に銃口をつきつけ、女を強引に連れ出して同棲した。

女は、それを強くこばむこともしなかったが、二十三日後、その水兵は突然行方不明になった。農園技師と女は、その水兵が夜釣りに出掛けて崖の上から海に落ちて死んだのだと告げた。

「その話は信じませんでしたよ。その水兵は泳ぎが非常にうまい男で、海に落ちたからと言って死ぬような奴ではないのです。おそらく腕力の強い農園技師が、拳銃をうばって射殺したのだろうと言い合ったものです」

と、P氏は、私に言った。

ピストルは若い軍属がうけついだが、かれは、一ヶ月もたたぬうちに再び農園技師と同居していた女のもとにやってきた。そして、無造作に技師を射殺してしまったのである。

女は、その若い軍属と同棲したが、十ヶ月後、軍属も射殺死体となって発見された。殺害者は不明であった。

険悪な空気がひろがり、人望のある「兵助丸」の老船長の指示で、ピストルが解体され、海に投げ捨てられた。ピストルがあるために今後も人命がそこなわれることを恐れたのである。

ピストルが海中に投棄された後は刃物による殺人がつづいた。そのような不祥事は、女の責任ではなかったが、彼女が存在しているために起こったものであることは確実だった。

女はおおらかな性格であったので、望まれればどのような男でも受け入れた。彼女は、争いが起こらぬように全員の協議で指名された男と同棲していたが、その間、他の男とひそかに情を交すこともしばしばだった。

時折り開かれる集まりで、男たちは彼女に密会の申出を手紙にかいてひそかに渡す。彼女はさりげなく承知か不承知かを答えるが、女はその折のことを、

「同棲していた男や他の男たちの目が厳しくて、私にラブレターを渡せないような時は、男が何気なく立上がるようなふりをして、木蔭から手真似で逢う月日を合図してきたりします。それに応じて、私も他の者に気づかれないよう

に微かに首を縦にふったり、横にふったりしたものです」
と、述べている。
女の小舎は遠く、そこへ約束の日に男がやってくる。密林の中を歩いてくるので、半裸の体は傷だらけになっていた。
「その姿が憐れで憐れで、どうしても出て行って逢ってやらずにはおられない気持になりました」
と、彼女は告白している。
女を中心に、淫靡な生活がつづいたが、その間にもかれらに対するアメリカ軍の投降勧告はおこなわれていた。島内に日本兵が残存しているということは、同島からのがれ出た島民たちによってアメリカ軍に伝えられていた。そのため、アメリカ軍は、飛行機からビラをまき、小舟を岸に接近させて、戦争が終ったことをスピーカーで告げさせたりした。が、アナタハン島の日本人たちは、それをアメリカ軍の謀略と考え、戦争の終結を信じなかった。
その間、女をめぐって刃物による殺人がつづき、「兵助丸」「曙丸」の両船長も病死して、三十一名の男は二十名に減っていた。
昭和二十五年四月下旬、突然女が姿を消した。
「カズちゃんが逃げ出したのは、身の危険を感じたからです。私たちの中で九人が殺されたり行方不明になっていましたが、もし彼女がいなかったら、そうしたことも起きなかったでしょう。それで、あの女がいると今後もだれかが殺される、いっそ彼女を消してしまえ、と主張する者も出るようになったのです。それを、或る男が彼女につたえたのです。お前を殺す者がいる、と言ってね。それで彼女は恐しくなって行方をくらましたのです」
と、P氏は、私に言った。
男たちは、手分けして島内を探したが、彼女は密林の中を巧みに逃げまわった。そして、一ヶ月後の五月二十三日、沖を通るアメリカ船を眼にして椰子の木にのぼり、パラシュートの布をふった。が、米軍に射殺される不安にもおそわれてそのまま物蔭に身をひそませて海上を見ていると、船からボートがおろされて近づいてきた。そのボートには、女がサイパン島にいた頃の知人である笹本海造が乗っていて、出てくるようにうながしたので、彼女は浜に出て行った。彼女は、落下傘の布で作ったブラウスに、兵隊のズボンを縫いちぢめたパンツをはいているだけであった。
その後、彼女はサイパン島に一ヶ月、グアム島に八日間とどまってから飛行機で日本にもどった。
彼女の証言によって、アナタハン島に残存している日本人の氏名があきらかになり、にわかに報道陣の注目を浴びることになった。また、救出活動も一層活潑になり、家族

たちの手紙などが同島に飛行機から投下されたり、船で海岸にはこばれたりした。そうした動きに、男たちの気持も動揺しはじめた。かれらが手にする新聞、雑誌や家族からの手紙は、すべて戦争が終ったことをしめすものばかりであった。が、かれらは、依然としてそれらを手のこんだアメリカ軍の謀略と信じこんでいた。

かれらは、その年の十二月に全員が集まり、日本軍がやってくるまで結束を守って同島を確保することを誓い合った。そして、今後日本が負けたなどということを口にした者は、銃殺に処すことを決定した。

男たちは、島内に散って生活していたが、翌二十六年六月九日、指導的立場にある下士官が単独で米軍に投降した。かれは、島に送りとどけられた妻の手紙の封筒が妻の手作りのものであることを確認、手紙に書かれていることが事実であると知ったのである。

かれは、米軍に収容された後、同僚の救出活動につとめた。小舟に乗ったかれは、スピーカーで戦争が終ったことを告げ、降伏を呼びかけた。また小型機にも乗って、上空からスピーカーで放送もした。

かれが島から出たことは、島に残っていた男たちに衝撃をあたえた。かれらは、敗戦を信じるようにもなった。

アメリカ軍の救出活動は熱をおび、男たちもそれに応ずることに考えが一致した。かれらは、米軍から指定されたソンソンという海浜に集結、椰子の葉で小舎を作って寝起きし、救出の日を待った。

六月三十日、米船ココパ号がソンソン沖に姿をあらわし、二艘のボートがおろされた。そこには、サイパン島民政官J・P・ジョンソン少佐が、翻訳官赤谷鑑らとともに乗っていた。

アナタハン島の生存者たちは、白旗をかかげて浜に整列し、ジョンソン少佐らを迎えた。かれらは、ココパ号でグアム島にはこばれた。

投降してから六日後、二十名のアナタハン島残留者は、飛行機でグアム島から羽田へ向かった。

「私たちは、アメリカ本国へでも連れてゆかれるのかと思っていましたが、機上から富士山を見た時、日本に帰ることができたことを知って、みな泣きました」

と、P氏は、眼をうるませて私に言った。

飛行機から降りたかれらは、家族と二百名にも達する報道陣にかこまれた。新聞、雑誌の座談会にかれらは引きまわされ、その日は横浜引揚援護所に一泊、翌日午後二時それぞれの郷里に帰っていった。

故郷でも歓迎され帰国の喜びにひたったが、中には悲哀を味わう者もいた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

或る男の妻は、四人の子持ちであったが、二年前に男の戦死の公報が入ったので八歳下のかれの弟と再婚し、一児をもうけていた。かれの妻も弟も、かれを複雑な表情で迎えた。事情を告白された男の驚きは大きかったが、かれは冷静な態度でそれを受け入れ、最善と思われる方法で解決した。かれの妻と弟を離婚させ、かれは妻をあらためて迎え入れた。そして、妻と弟との間に生れた子供を、養子として引き取ったのである。

アナタハン島で三十一名の男の中にまじって生活していた女性も、悲劇的な道をたどった。

彼女は前年に帰国していたが、夫はすでに再婚し、二人の子の父にもなっていた。孤独になった彼女に興行師の手が伸び、彼女は「アナタハンの女王」として小さな劇場をまわって歩くようになった。それは人々の好奇心をそそって評判になり、映画化もされた。が、彼女の得た物は少なく、失意のまま故郷へ帰り、アナタハンという簡易食堂をひらいたりした。

その後、彼女は、二人の子をもつ男と再婚し、ようやく平穏な日々を送ることができるようになった。それから八年後、夫は死亡し、彼女はタコ焼屋を営んで生計を立てていた。店の壁には、彼女の舞台写真が飾られていた。

彼女は、ひっそりと生きたが、昭和四十八年に病死した。年齢は、五十歳であったという。

「今の若い人には、アナタハンと言っても、あなたはんという関西の言葉ですかと言われましてね。昔話になってしまったんですな」

と、P氏は、淋しそうな顔をした。

私が、アナタハン島にいた女性の死を告げると、P氏は、

「亡くなりましたか。気持のいい女でしたが……」

と、表情をくもらせた。

私は、P氏に、

「仲間同士で殺し合うのを見ましたか」

と、たずねてみた。

P氏は、私に視線を据えると、

「一人だけ……」

と、低い声で言った。

氏の家は大通りに面していて、車の往来がはげしく、大型トラックが通るたびにガラス窓がふるえた。

私は、氏の家を辞した。

アナタハン島からの元日本兵たちの帰還について印象に残っているのは、昭和三十五年にグアム島で発見され帰国した二人の元日本兵である。

その年の五月二十一日早朝、ビセンテ・マニプサンとク

レメンテ・サントスという二人のグアム人が、椰子蟹をとらえるワナを仕掛けていた時、汚れた服を身につけた裸の男を発見した。

髭の長くのびたその男が逃げだしたので、かれらは追いかけた。男は三百メートルほど逃げたが、そこでつかまり、激しい格闘になった。結局、男は押えこまれて捕えられ、不審者として警察に引渡された。

取調べの結果、意外にもそれは皆川文蔵という元陸軍歩兵一等兵であることが判明し、ただちに日本へも伝えられた。

その後、かれの口から他に一人の元日本兵が生存していて、共同生活していたことがあきらかにされた。そのため米軍では、皆川氏に案内させて、かれらが住んでいた密林内の小舎へ赴いた。そこには、皆川氏の言葉通り一人の男がひそんでいて、説得に応じ米軍に収容された。それは伊藤正元陸軍軍曹であった。

終戦後十五年間も日本の敗戦を信じず、グアム島で原始人に近い生活をしてきた二人の元日本兵の出現は、人々を驚かせた。新聞、雑誌は現代のロビンソン・クルーソーだと表現したが、二人が帰国をこばんでいるというニュースに、人々はあらためて戦争の苛酷さを感じた。かれらが帰国をこばんでいる理由は、捕虜の身で、おめおめと生きて祖国には帰れぬということと、米軍がわれわれをだまして、どこかへ連行するのではないかという疑いからであった。

日本とアメリカ両国の赤十字社は困惑し、説得につとめ、ようやくかれらを米軍用機に乗せて立川飛行場に運んだ。

二人は、長い密林内の生活で言語も忘れていたが、記者団の、

「グアム島に、まだ他の元日本兵が生存しているのではないか」

という質問に、

「おそらく、他には残っていないものと思う」

と、答えた。

グアム島に米軍が上陸作戦を開始したのは、昭和十九年七月二十一日で、翌日までに兵力の約八割が死亡、残りの兵力は全島に散った。その後、戦闘がつづけられ、ほぼ全員が死亡したと推定されていた。

皆川、伊藤両氏は、終戦時に五人の元日本兵がいたが、それらはまちがいなく死亡したと思うと証言した。その中に、昭和二十年七月三十日付で戦死公報が発令されていた元陸軍軍曹横井庄一氏がいた。

横井氏がグアム島で発見されたのは、皆川、伊藤両氏の帰国からさらに十二年後の昭和四十七年一月二十四日であった。終戦後二十七年も経過したのに、密林の中で生きつ

づけた横井氏の存在は、日本のみならず世界の人々に大きな驚きをあたえた。

さらに横井氏が帰国してから一年もたたぬ昭和四十七年十月十九日、ルバング島で元日本兵二人が現地警察軍と銃撃を交し、一人が死亡、一人が逃走したというニュースがつたえられた。

その日の朝六時三十分頃、同島北部の丘陵地帯にある畠で、二人の元日本兵らしい男が刈取った稲の束を焼いているのを農民が発見した。農民たちは、ただちに警察本部地区駐在所に通報した。

たまたま同地に派遣されていたナポレオン・ソット軍曹が、自動小銃、カービン銃を所持する四名の警察隊員と現場に急行、元日本兵と銃撃戦を展開した。元日本兵は、茂みに入り応射していたが、急に銃撃を中止した。

警察軍は、約三十分間、茂みを監視してから内部に踏み入った。と、十二、三メートル入った個所に被弾した一人の男が呻き声をあげて倒れているのを発見した。男は、まだ生きていて、かすかになにか言葉を口にしていたが、発見してから数分後に死亡したという。

死亡した男は、元陸軍歩兵一等兵小塚金七氏で、同行していたのは元陸軍歩兵少尉小野田寛郎氏であったのだが、小塚氏については、遺族、友人、知己の手で「声はとどいていたのに」という追悼録が編まれている。その追悼録には、小塚一等兵の死亡した血塊の残る茂みや、焼いた畠などの生々しい写真が掲載されている。

遺体は、その日のうちに飛行機でマニラ市のニコラス・フィリピン空軍基地に運ばれ、日本大使館員が遺体確認をし、同夜東京の外務省に打電した。遺品は、小銃弾、雑のう、大正九年の五銭、昭和十四年の十銭硬貨各一枚、投降勧告ビラ等であった。

追悼録には、左のような検視証明書がのせられている。

「私は、一九七二年十月二十日、故小塚金七の体を検視し、死因は以下の通りであることを証明する。

下顎、喉頭、臼歯、腕骨の破砕。顔面、胸部、右腕の弾着傷による衝撃と出血

（署名）　アベラルド・ルセロ

（印刷者名）　アベラルド・ルセロ博士

（称号）　法医学事務官

（住所）　マニラ首都警察」

下顎……の破砕の「破砕」とは、なにを意味するのか。それらの文字は、小塚氏の死因が被弾によるものだけではないことを確実に物語っている。被弾し傷を負った小塚氏に、島民が激しい暴力を加え、それによって下顎、喉頭、臼歯、腕骨を破砕させるに至り、それが死因の重要な要素

になったと考えるべきであろう。島民がそのような暴力をふるった動機は、恐怖の対象でもあった元日本兵に対する憎しみであったにちがいない。

小塚氏の死亡告知書は、昭和二十二年九月三日付で、

「昭和二十年八月一日、比島ミンドロ島ミンドロ州ルパン島（ルバング島）で戦死せられましたのでお知らせします。

東京都知事　安井誠一郎」

という文書が父の直吉氏宛に送られていたが、それが昭和四十七年十一月六日付で、あらためて死亡告知書が出されたのである。

戦後長い歳月をへた後に帰還してきた元日本兵の、南の島での生活は、それらの人の手記でうかがい知ることができる。それと同じように、江戸期の漂流者の体験も、多くの記録になって残されている。

ただし、それらの記録は、幕府または漂民の生れた土地の藩の取調べ書で、漂流者の手記ではない。戦後、南の島で敗戦を信じず身をひそめていた元日本兵たちの存在は、戦争の苛酷さをしめすものだが、江戸期の漂流者たちも、幕府の政策の犠牲者であったと言うことができる。

江戸時代には、千石船といわれる運送船がさかんに使われていた。それは、瀬戸内海で発達した弁才船を改良した帆船で、経済的には積載能力にすぐれ、またそれまでの帆走と櫓でこぐことを併用していた船と異って、帆走専門のすぐれた性能をしめしていた。

しかし、千石船には、シケに弱いという重大な欠陥があった。その主なものとしては、第一に甲板が水密式ではなかったことがあげられる。千石船の胴の間といわれる船の中央部の甲板は、ただの揚げ板式になっているだけなので、荒天になり波がふりかかってくると、海水の流入をふせぐことができない。たちまちその部分から海水が船内に入って、船は水びたしになってしまい、沈没の憂目にもあう。

また、舵がこわれやすいのも、難点であった。

当時の各地の港は、河口にあるものが多く、水深は浅い。そのため、千石船の舵は、水底にひっかからぬように引きあげ式になっていた。それは、賢明な仕組みだったが、同時に固定した西洋の船の舵よりもろいという弱点を秘めていた。舵の羽板はきわめて大きく、激浪にたたかれるとこわれ、航行は不能になった。

こうした船としての構造上の欠点がある上に、鎖国政策によって西洋の進歩した航海術をとりいれることもできず、千石船は、沿岸航海にのみ適していたのだ。

幕府は、千石船を使用することを奨励していたが、それは鎖国政策と無関係ではなかった。外洋を自由に航行でき

るような船が造られれば、それらに乗ってひそかに異国へ行く者もいるだろうし、西洋の文物を持ちこむ者もいるかも知れなかった。それは、鎖国政策をとる幕府にとっては脅威であり、防止しなければならぬことであった。そうした事情から幕府は、外洋の航海に適さぬ千石船を使用することをすすめたのである。

しかし、同時に千石船の使用は、多くの海難事故の発生をうながすことにもなった。多くの船は沈没し、多くの船は水びたしになったまま漂流した。シケにあって海岸から沖に流され、舵を失えば、かれらには死が待っていた。漂流事故の背後には、幕府の鎖国政策があったのである。

日本をとりまく海の状況がきわめて複雑な変化をしめすことも、漂流事故を続発させる重要な原因であった。

殊に、黒潮の存在は、漂流事故とかたく結びついている。その世界的に有名な潮流は、九州、四国、本州と日本列島沿いに流れ、所によっては時速十キロにも達するほど速度も早い。

黒潮は幅も広く、遭難して沿岸からはなれた千石船がその潮流にのってしまうと、たちまち遠方へ運び去られる。遭難位置によって行先はさまざまで、或る船は、伊豆七島、小笠原諸島方面へ、また他の船は太平洋のまっただ中へ押し流され、北アメリカ方面、アラスカ方面、反転してフィリピン方面へと流される。

太平洋の中央部に押し流された好例に、「督乗丸」という千二百石積の船がある。

同船は、文化十年（一八一三）十月下旬、江戸を出帆、名古屋にもどる途中遠州灘で荒天にあい、難破。あてもなく漂流した。帆柱は倒され、舵を失った「督乗丸」は、黒潮にのって東へと流された。島影も船影もみず、その年は暮れ、翌年も一年間漂流をつづけた。

同船が、イギリス商船フォレスタ号に発見・救出されたのは、難破した翌々年の二月であった。発見された位置は、北アメリカのカリフォルニアのサンタバーバラ沖で、乗員十四名中三名のみが生存していたにすぎなかった。

これに類した漂流事故は数限りなく、乗組員が生きて収容されたことは稀と言ってよい。

大正十五年の「良栄丸」の漂流は、大半の江戸期の漂流船の運命を端的に物語っているように思える。

同船は和歌山県のマグロ漁船で、その年の十二月七日、寄港していた千葉県銚子港を出港、漁に従事していたが、低気圧にまきこまれ、行方不明になった。銚子港では、同船を捜索したが発見できず、沈没したと推定し、十二人の乗組員も死亡者として処置された。

「良栄丸」が遭難した翌年の九月下旬、アメリカのシアト

ル沖に漂っている同船をアメリカの商船が発見した。船内をしらべてみると、生存者は一人もなく、ミイラになった遺体と白骨化した遺体があるだけであった。

江戸期の漂流船の大半は、「良栄丸」と同じように幽霊船となってあてもなくただよい、朽ちて沈むか、海浜に打ち寄せられて木片となって散ったのである。漂流船は、広大な洋上を微細な点となってただよい流れてゆく。孤島につくことや外国船に発見されることは、稀な偶然と言っていい。中には天保年間に難破した「栄寿丸」と「観音丸」のように、漂流船同士が太平洋上でわずか一町（一〇九メートル）ほどの距離ですれちがうという現象も起きた。これは、奇蹟という以外にはなく、海の演ずるドラマである。

そうした漂流者の中に、土佐ノ国（高知県）の長平という男がいた。かれも黒潮にのった男の一人であった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.